会頭講演

「東方医学の精神文化と身体観」

東邦大学医療センター大森病院東洋医学科
田 中　耕 一 郎

現在、日本では全医師 30 万人の 80%以上が漢方薬を処方する状況となった。漢方薬は今までになく普及し、処方量が急激に増加している。しかし、一方で、専門医、指導医に当たる人材は全体の 3%にも満たず、さらに減少傾向にあり、従来の体系的な教育が困難になりつつある。さらに東洋医学を生業として志す医師が漸減している。特に 20 代、30 代の医師の減少は顕著であり、次世代を担う医師が極端に不足している。漢方専門医は絶滅危惧種という論考も散見するようになった。このギャップはどこから生まれるのか、どこを向いていけばよいのか、一石を投じたい。

１）現代の経済論理の中で、多くの分野において専門性は解体されてきた。その戦略モデルは東方医学の分野においてもそのまま当てはまる。ハリー・ブレイヴァマンの分析をもとに、具体的にその専門性の解体プロセスを述べてみたい。

２）西洋文化に対して、東洋文化はどのように対峙すべきか、という切実な問いは医療以外の分野で多くの人々が生涯のテーマとしてきた。その行きついた核となるものは、いずれも東洋の精神文化と身体観であった。井筒俊彦、小林秀雄を紹介し、その一旦に触れたい。

３）型を身につけ、創造性を発揮する。

型、創造性をもとに、それぞれの臨床家が人を観、ベストを尽くす。その実態はすぐに評価にはつながらないかもしれない。むしろ、アニメーションの分野の試行錯誤にみるように、創造的であればあるほど、最初は視聴率が上がらず、途中打ち切りとなった例が多い。世の中の潮流にすぐには乗らないことは多い。ただ、創造性を失って、経済論理に覆いつくされてしまうことは、長期的には、その分野の衰退を意味する。すぐに効果のある処方箋を求めず、じっくり腰を据え、生涯深め続けることが、長期的には正攻法である。このことこそが、東方医学の分野に魅力を与え、後進の育成にもつながると考えられる。